～セフィア～　バーンタウンの精錬工房

巖櫻　禄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～セフィア～　バーンタウンの精錬工房

【Ｎコード】
Ｎ４５６９Ｄ

【作者名】
巖櫻　禄

【あらすじ】
ナステリア王国の田舎町、バーンタウンで精錬工房を始めたセフィと愛猫シフォンの冒険どたばた活劇。見習い精錬師でしかないセフィがひょんなコトから冒険に！

第1話：いつもの朝・・・

　窓から入ってくる木漏れ日で目の裏が赤くなっているのに気づいた。
「ぅ～ん・・・また寝坊しちゃった・・・」
布団の中でため息とあくび混じりにつぶやく。
今日もいい天気だ。雲が気持ちよさそうに浮かんでる・・・
？？なんか足の上が重たい・・・
・・・ゴソゴソ・・・
「ほぁ？あ、おはよ。」
「あんたねぇ、いっつも人の上で寝て。」
「ふぁ～・・・だって気持ちいいんだもん。」
伸びをしながらシフォンが答えた。
はぁ、飼い主に似るって言うけど、朝寝坊まで似なくても・・・
「そんなこと言って！きちんとしないとエリスに嫌われちゃうよ」
「うるさいなぁ。だいたい自分が寝坊したのに。そんなのセフィに関係ないでしょ！それより寝坊ばっかりしてるとレオンに忘れられちゃうよ。」
「うるさーいっ！猫の分際でぇ！ファントマ取っちゃうぞ！」
「イイよ、別に。僕は不便しないから。」
「じゃあイイ。ご飯つくってやんないんだから。」
毎朝の家の出来事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

　あ、初めまして。私はセフィア。
セフィア・フレストームって言います。
セフィって呼ばれてます。
こっちは、私の相棒ってことにしておこうかな、シフォン。

ブラックジャイアントっていう猫なんだけど、全然大きくないの。
本人はコンパクトに納めたっていってるけど、早い話がチビ。
普通のブラックジャイアントは倍くらい大きいからね。
シフォンが子供の頃に私が拾って来ちゃってからずっと一緒にいます。
何で猫がしゃべれるかっていうと、首にぶら下げてるファントマのおかげ。
これは私のママがつくった魔法の石。
この石があれば猫でもしゃべれるようになるんだって。
もちろんシフォンに合わせて精錬したモノだから効くんだろうけど。
私のママは精錬術師。
いろんな物のエレメントを使って、いろんな魔法のアイテムをつくってる。
エレメントって言うのはいろんな物に入ってる魔力みたいな物かな？
それを取り出して、凝縮して、召還させて、いろんな物を造るの。
ファントマとかね。
いまはパパと一緒にナステリアに住んでるの。
ナステリアって言うのはここファレリア王国でも1番大きい町。
ファレリア城の城下町。
そのナステリアで精錬術師をやってて、ファレリア王立軍の使う剣とか造ってるんだって。精錬術師は使う人に合わせて、いろんなエレメントを調合して、軽くて丈夫でその人の引き出せる魔力を持った剣を造るの。
その人ごとに引き出せる力が違うんだって。
体質みたいな物かな。
ママはその辺の調合がすごくうまいってパパが言ってた。
パパの剣、トランサルファもママが造ったの。
その剣でパパは有名になったんだって。
今は王立軍でファレリア城の警備をしながら、王立軍の士官学校で先生をしてるの。

わたしはママに教えてもらって精錬術師を目指してる。
この間、やっとエリフィールウォーターを作れたんだ。
あ、フィールウォーターって言うのは、体力を回復させる水。
精錬術師なら誰でも作れるくらい簡単な物なんだ。
そのフィールウォーターの濃いのがエリフィールウォーター。
ちょっと難しいんだよ。
エリフィールウォーター1本ときれいな水があれば誰でもどこでもフィールウォーターを２０本作れるんだ。
薄めればいいだけ。
それで、エリフィールウォーターが作れるようになったっていうんで見習い卒業！
一応人の役に立つ物何か1つでも作れれば1人前として、自分の工房をもてるんだ。
少ない貯金をはたいて、やっと造った私の工房がここ「精錬工房せふぃ」
どうにか1人と1匹が食べていけるだけは稼げるようになったって感じ。

とにかく私は朝が苦手。
一緒にいるシフォンも朝が苦手。
っていうよりはシフォンは寝てるのが好きって感じかな？
家にいるのはこの2人だから誰も起こしてくれない。まぁ、朝早く起きなくても困ることはないんだけどね。
でも最近は出来るだけ早起きしたいんだ。

～1週間前～
「ねぇ、セフィ。間に合うの？」

無理な注文を受けちゃったからしょうがないんだけど、もう2日間も寝ないで精錬をやってる。
明日の朝までにって言う注文なんだもん。
お客さんが明日から冒険に行くみたい。
「わかんないけどやってみなくっちゃ。お客さんは明日の朝取りに来るって言ってたんだから。ねぇ、今何時？」
「え～っとね、3時すぎたよ。」
「へ？まだ夕方？」
「違うよぉ。朝の3時！」
「え～！あと4時間しかないよぉ！間に合うかなぁ？」
「寝ぼけてないようにね。」
「しょうがないじゃない。もう2日間も徹夜だよ。」
「まぁ、しょうがないね。あんな無理な注文受けちゃうんだもん。」
「だってぇ、仕事やらなきゃ食べていけないよ？」
「ほら、急がないと。」
「あ、いくつやったっけ？」
「まったくぅ。あと12個！」
「あ、そうそう！わかってるって！」
「・・・不安だな・・・」
「ちょっと黙ってて！これは集中しないとエレメントを取り出せないんだから。」
「はいはい」

インテルス山の石を水晶の台の上に置く。
この水晶の台は私が最初に造った物。
っていってもママが造ってるのを少し手伝っただけだけどね。
こんな物、私に作れるはずがないモン。
今でも難しいんじゃないかな？
材料が高いしね。
その水晶の台に乗せた石に手を当てていると何となく暖かくなって

くる。
その暖かいのをそーっと上に持ち上げると・・・・・・・
あれ？もう１回。
そーっと、集中して・・・・
よし！出てしまえばもう戻ることはない。
「ふぅ、いつ見てもきれいだね。インテルスエレメント！」
青緑に光る半透明のふわふわした・・・・見てると落ち着くんだ。
「早くしないと酸化しちゃうよ。」
「わかってるわよ。・・・いしょっと」
エレメントキーパーって言う箱に入れる。何とかっていう木で出来てるんだって。
忘れちゃったけど。
これも私が造った物。
っというより私が手伝ってママが造った物。
これくらいは今なら作れるかな？
「よぅし。次・・・」
「早くしないと間に合わないよ」
「大丈夫、後１０個くらいだから。」
「気を付けてよ。インテルス山の石はエレメントを出すときに壊れやすいから。」
「は～い。わっかりました。シフォン大先生。」
「もぅ・・・先に寝るよ」
「あれ？いつでも寝てたんじゃなかったっけ？」
「そんなこと言ってると、最後の袋詰め、手伝わないよ。」
「大丈夫！たたき起こすから！お休み！」
「ふぁ～。どうせそんな事だとは思うけど。先に寝るよ。おやすみ・・・」

パタパタパタ・・・ガシャ～ン！
「あいたたた。」

ここも片付けなくっちゃ。
「ねぇシフォン！ちょっと。」
気持ちよさそうに丸まっているシフォンのしっぽを引っ張る。
「ふぅ？朝？」
「手伝って！。」
「・・・袋詰めを？・・・・」
「そう！これは君が居ないと出来ないんだから！」
ゆっくり伸びしてるシフォンを私が抱えて走る。
「早く！時間ないんだ！」
「へ？・・・あ？・・あぁ！！もう約束の時間すぎてる！」
「そうなの！お客さん広場で馬が来るの待ってるって。」
「急がなきゃ！」

大きな壺の中身を小さな袋に移すのは大変。
シフォンに袋を持っててもらわないと入れられないんだ。
「そ～っとだよそ～っと・・・」
「わかってるわよ。でも急がなきゃ」
「駄目だよ、そんなにあわてちゃ。エレメントがまだ落ち着いてないん・・・・・」
「はいはい、ここくわえててね！」
「んんんぐぐんん！」
そーっと、そーっと。でも急いで急いで！

ふぅ、袋詰め完了！
「よし！急いで持っていこう！」
「馬を待ってるって事はセントラルパークの隣？」
「そう！いこう！」

～1時間後～
私はセントラルパークのベンチに座っていた。
あぁ～いい天気なのにね。
「これ、どうするの？」
「どうしようもないよ」
「捨てちゃうの？」
「捨てたい気分だよ。」
結局間に合わなかった。付いたときにはもう出発した後だったんだもん。
がんばったのにね。
「だから急げっていったのに」
「しょうがないでしょ！あれからインテルス山の石が４個も割れちゃったんだから」
「あぁあ、あれほど言ったのに。」
「わかってるわよ。・・・そうはいってもどうしよう。こんなにたくさんのエリフィールウォーター」
「誰か買ってくれないかな？」
「ここじゃ無理だと思うよ」
「それもそうね」
「ナステリアに行って売る？あそこなら売れると思うよ。」
「行くのめんどくさいなぁ・・・・」
「確かにね・・・」
途方に暮れる1人と1匹。絵にもならないね。

しばらくぼ～っとしてたら、男の人が歩いて来た。
年は同じくらい。
結構背が高くって、背筋がぴーんとしてて・・・
軍服を着て、腰から剣を下げて・・・
何だろう？私に用があるのかな？
っと思ったら、日の当たるところに立ち止まって剣を抜いた。

素振りでもするのかな？
・・・
「ねぇ、あの人さっきから何してるんだろ？」
もう、半分寝ているシフォンの耳をつまんで小声で聞いてみた。
「ん？あぁ、剣にサンエレメントを吸収させてるんだろ？」
半分だけ目を開けて。眠たそぉ～・・・
「ふぅん、太陽に当てるとエレメント吸ってくれるんだ」
「精錬術師ならその位わかってなきゃ。火の泉っていうエレメントって知ってる？」
「う、うんうん。えっと、海水のエレメント・・・だったかな？」
「それは火の水。火山の石のエレメント。」
「あ、そうそう。駄目だねぇ。寝てないから、寝ぼけてるね。」
「1年中寝ぼけてるんだね。」
「もぉ」
「その火の泉を剣に召還させると太陽光からエレメントを補充してくれるんだ。」
「へぇ。エレメントって減っていくんだ。」
「攻撃の仕方によってはね。エレメントを減らしたぶんダメージも大きい。」
「ちょっと見せてもらおうか？」
「え？」

「あのぉ」
「はい？」
「その剣、火の泉が召還されてます？」
「ええ。よくわかりましたね。」
「あ、へへ、一応、私精錬術師ですから！ぐっ！！」
いきなりシフォンに噛みつかれた。
イイじゃない。私だっていいとこ見せたいもん！
「あぁ！そうなんですか。さすがですね。」

「いえいえ、そんな・・・あのぉ、よければ少し、見せていただけませんか？」
「へ？あ、ええ、構いませんよ」
剣を受け取った。
（うわ、おっきい）
この人が持ってるときはそう見えなかったけど、とっても大きい。
これだけの大きさに召還させるのって、大変なんだろうな。
へ～、こういうの作れるようになりたいな。
「良い剣ですね。」
「ありがとうございます。精錬術師の方にそう言っていただけるとうれしいな。いつも太陽に当ててた甲斐があったかな？」
優しそうな笑顔で話しかけてくれる。
ぼーっとしてるのは寝不足だけじゃなさそう・・・
「毎朝、こうしてるんですか？」
「天気のいい日はね。登城する前いつも」
「へぇ・・・登城って言うことは王立軍の方ですか？」
「はい！ファレリア王立軍装甲兵隊第2師団ファレリア城警備担当のレオン・ファスターです！」
すごい！レオンさんってまるで兵隊さん！って、兵隊さんなんだよね。
「バーンタウン精錬術通り「精錬工房せふぃ」のセフィア・フレストームです！」
ついついつられて、私まで兵隊さんみたいな自己紹介しちゃった。
「あ、今の挨拶変でした？」
驚いたような顔で私の顔を見てる。
「すいません。もう1度やり直し。バーンタウンの精錬術通りで「精錬工房せふぃ」っていう小さい工房をやってます。セフィア・フレストームです。セフィって呼んでください。」
「あの・・・」
「はい？」

「つかぬ事を伺いますが、お父上はフレストーム少将であらせられますか？」
「はい・・・」
あ、そうか、パパは王立軍の学校の先生で、ファレリア城の警備をやってるんだ。
「父をご存じでした？」
「はい！士官学校の時の教官で、今の上官でもあります。」
「は・は・は・」
なんか、恥ずかしいよね。
「フレストーム少将から、お嬢様が精錬術師を志していると伺っておりました。まさか、こんな形でお会いできるとは思っても・・・・」
「あのぉ・・・」
「はい！」
「あまりかしこまらないでください。そう言うの苦手で・・・」
「あ、すみません。ついつい少将の身内の方なので・・・」
「私は軍の人じゃないですから・・・」
「そうですね。すみません。あ、そろそろ時間なので、失礼します！」
って、あなた人の話聞いてた？敬礼なんかして・・・
「あ！ははは・・・すいません。いつもの癖なんですよ。」
ふふふっ。お互いに笑っちゃうね。
「また今度お会いしましょう！天気のいい日はここにいます。」
「わかりました。ガンバって行ってらっしゃい！」
「じゃ！」
あぁあ、行っちゃった。なんかいい感じだったのになぁ・・・
「ねぇ、目がうつろだよ・・・」
は！シフォンがいたんだ。忘れてた・・・
「は！・・・うるさいわねぇ。いいでしょ！」
「恋する乙女はつらいねぇ。」

「そんなんじゃないってば！」
「じゃぁ、どんなのさ。」
「う～ん・・・まだ予感・・・くらい」
「同じだな」
「むぅ・・・・・さ、かえって寝よう。」
「それでどうするの？これ」
「あ、そうか。」
いきなり現実に引き戻されちゃったな。
どうしよう。
行き場のなくなったエリフィールウォーターたち。
「とりあえず持って帰りましょ。」
「こんなに飲んだら目が冴えちゃって寝れなくなるよ。」
「自分で飲むなんて言ってないでしょ！ほら、帰るよ」
「ふぅぁ～、眠たい・・・」
「そうね。帰ったら寝ましょ。今日、お店はお休み・・・」
「そう願いたいね。」
「ふぁ～・・・」
帰り道のエリフィールウォーターの重たさったら、もぅ・・・・

第2話：始まりの訪問

～翌日・朝～
「ふぅ、これでよしっと」
工房の入り口脇に立て看板
『エリフィールウォーター　限定１０個　特価　５０％ＯＦＦ！！』
「赤字だね。」
「いいの、捨てるよりましだよ」
「これでお客さんが来てくれればいいけどね。」
「そ、客寄せだよ。そう考えれば悪くないモンね！」
「そううまくいけばいいけど。」
「さ、仕事よ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

かちゃ・・・・
・・・・・・・・
革のブーツ、革のスパッツ、革のコート、腰にアイテム袋とロングソード。
ブロンドの長髪をのぞけば、いわゆる冒険者スタイル。
身にまとっている物すべてが体になじんでいる。
体裁がそれなりの経験を物語っている。
「どなたかいらっしゃる？」
きりっとした女性の声だ。
「あ、お客だ・・・セフィ、お客さんだよ・・・ねぇ、セフィってば！」
「ふぁ？あん？」
「お・客・さ・ん！」

「あ、あ！はい！いらっしゃいませ！」
あわてて飛び起きて営業スマイル！ふぅ。
わぁ、すごい！女冒険者！
背も高いし、すごくかっこいい・・・
「表にエリフィールウォーター半額ってあったんだけど。」
やったぁ！看板効果絶大だね！
「あ、はい！今セールやってるんです！」
「そう・・・2つほど頂ける？」
「ありがとうございます！」
「それから・・・」
「はい！」
「ここのご主人は？」
あ、やっぱり私の店だと思ってないんだ。私ですって言ったら・・・
「私・・・ですぅ・・けど。」
「そう。」
じゃあいいわ。他を当たるから。って言われそう・・・
「じゃあいいわ。あなたに聞きたいんだけど。」
「すみません、お役に立てなくって」
「あなた、人の話聞いてたの？」
「はい？」
「あなたに聞きたいことがあるの。」
「あ、は、なんでしょ・・・・」
「妖精の卵は作れる？」
妖精の卵かぁ。
妖精の卵って・・・・造ったことはあったよね。
うん、大丈夫！
「え、えぇ、作れます・・・」
「1週間後に受け取れるかしら？」
「はい！」
「じゃぁ、御願い。私はシェリル。シェリル・ガードナー」

「あ、セフィアといいます。」
「よろしく、セフィア。」
「セフィって呼んでください。シェリルさん」
「シェーンでいいわよ。1週間後に取りに来るわ。」
「わかりました。シェーンさん。それじゃ、え～っと・・・・エリフィールウォーター特価品2個で・・・４００Ｇになります。」
「はい、４００Ｇね。また来るわ。」
「ありがとうございました！」

～次の日・夕方～
「ふぅ、エリフィールウォーター、売れ残りは2っつね。」
結構売れちゃった。
半額だもの。当然ね。
「妖精の卵、どうするの？」
「あ、そうね、えーっと・・・どうやって作るんだっけ。」
「うーん・・・覚えてないね」
「そうだね、結構前だもの。作ったのって。」
調べてみないと解らないね。
確か前に作ったときは、ママに教えてもらいながらだったから。
ママからもらった参考書、『秘伝の書』。
おばあちゃんのおばあちゃんのずーっと前から使ってるんだって。
ぼろぼろで所々読めなくなってるんだけどね。
でも、これに載ってるのは基本的なものや、古いものばっかり。
「えーっと・・・・妖精の卵・・・・っと」
「載ってる？」
「ん～・・・・・あ、あった。これこれ。」
・・・必要な材料は・・・・アリタニーヤ河の石だね。
明日買いに行こう。
・・・はぁ、結構作るのに時間かかりそう。
「今日はもう寝よう。」

「なんだか疲れちゃったね。」
「うん・・・」
あ、そうだ。
「・・・ねぇ、シフォン。」
「なに？」
「明日ちょっと早起きしようかな。」
「いつもゆっくりなのに、どうしたの？」
「ん？ちょっと・・・ね。」
「僕も起きなくっちゃだめ？」
「ううん！寝てていいよ、寝てて。」
「起きちゃダメ、みたいだね」
「そ、そんなことないよ。」
「あ～、レオンさんに会いに行くんだろ。」
「う〝・・・・」
「明日は朝から雨だからいないよ」
「え〝～、いじわるぅ。」
「僕は何もしてないよ。」
「ふぅ、そうか、それじゃ明日はゆっくり寝てよっと。」
「どうせ起きれないんだからね。」
「そんな事ありませんよ～だ。」

～翌日・バーンタウン大通り～
「わるいな、セフィ。うちも切らしちまってるんだ。」
「はぁ、そうですかぁ。」
「いやぁ、最近アリターニヤの方に行ってくれる冒険者がいなくってな。」
「そっかぁ、次、いつ頃入ります？」
「さ～てね。どうだか。明日かもしれねぇが、来週かもしれねぇ。」
「そうですか。ありがとうございました。」

「悪いね。また声かけてくれよな！」
これで４件目、なじみの道具屋は全部当たった。

「何でないんだろ？アリターニヤ河の石なんてどこにもありそうじゃない？」
「アリターニヤ河の石は高級品だからね。それに、最近アリターニヤの方は、モンスターが多いって言う話だよ」
「ふーん・・・」
「ね、『バレスター商会』は？」
「え～、あそこ、高いんだもの。」
「行って見ようよ。ね。」
「なによ、買い物嫌いなあなたが、ずいぶん乗り気じゃない？」
「あそこならあるかと思ってさ・・・・」
「あ！そっか」
「え、なに？」
「そういえば、あそこにかわいい猫ちゃんいたねぇ。何て言ったっけ？」
「え、あ、うん・・・エリス・・」
「そっか、シフォンはエリスちゃん狙ってるんだ。」
「そ、そんなことないよ！」
「はいはい、解りました。バレスター商会行ってみましょ。」

～バレスター商会～
「うわぁ・・・すごい人」
広くて明るい店内。
とても道具屋だなんて思えない。
赤い絨毯にきれいな陳列棚。
でも、お客さんはみんないい格好してる人たちばかり・・・

「・・・お金持ちみたいな人ばっかりだね・・・」
「うん・・・趣味で精錬やってる人たちだからねぇ。」
「金持ちの道楽か・・・。」
皮のアイテム袋ぶら下げて来るところじゃないね。
「いらっしゃいませ。どのようなものをお探しでしょうか。」
初老の店員が話しかけてきた。う〝、ちょっと緊張・・・。
「あ、あ、の、アリタニーヤ河の石を・・・」
「それでしたら、こちらに・・・」
その店員が店の奥の方に案内してくれた。
「あ、シフォン。ちょっと、どこ行くの！」
「あ、う、ん、ちょっと・・・。」
シフォンの行く方向に目をやると・・・
あちゃ～。噂のエリスちゃんだ。
なるほど。
私から見てもいい女、って言うのかな？
ふわっとした白い毛にエメラルドグリーンの透き通った目。
シフォンといえば、もう魂を抜かれてるみたい。
「お手上げ・・・だね。」
シフォンは放っておこう。
「お客様、こちらになります。」
「あ、ありがとうございます・・・」
「お決まりになりましたらお呼び下さいませ。」
深々と頭を下げて初老の店員が立ち去る。
ふぅ。在るところには在るもんね。
棚のケースにアリタニーヤ河の石が１０個くらい・・・。
「うわぁ、高い・・・」
値札には『１２００Ｇ』の文字。
いつもの相場の３倍くらい。
こんなの買えないよぉ・・・っと、その時。
「きゃ！なんですの！この汚いのは！だれか！」

「は、はい！どうされましたか、イアンお嬢様！」
イアン？！あれがここの有名わがままお嬢様かぁ。
「何ですの、これは！私のかわいいエリスが汚れます！」
「は！申し訳在りません。」
はぁ、絵に描いたようなお嬢様だね。
っと、感心してる場合じゃない。
汚物扱いされてるのはシフォンだもの。
「すいません。家のが何か・・・」
「あーら、また汚いのが・・・」
「え？！」
「猫は飼い主に似るって言うのは本当みたいねぇ。ほほほ・・」
な、なんですと！
「爺！そろそろ出かけます。馬車を。」
「はい。」
「ちょ、ちょっと！」
「あぁ、あなたに一つ教えて差し上げるわ。ここはあなたのような方の来る所じゃなくってよ。」
くっ・・・。
「な、なんですってぇ・・・」
「お嬢様、表に馬車のご用意が・・・」
「ご苦労様。では、ごめんあそばせ。」
不適な笑顔で馬車に乗り込むイアンとエリス。
悔しいけど、様になってる。
住む世界が違うんだなぁ。
「あなたもとんでもないものに惚れちゃったね。」
「え、あ、うん・・・」
「諦めた方がいいかもね。」
「・・・いい感じだったんだけどな・・・」
「だまされてるだけよ。」
「そんなことないって。」

と、そこへさっきの初老の店員
「申し訳ございません。お嬢様が失礼なことを。」
「いえ、・・・」
「お詫びにこれを・・・」
と、差し出されたのはアリタニーヤ河の石が5個。
こんなに買ったら・・・3ヶ月の生活費なくなっちゃう。
「いえ、結構です。」
強がっては見たけど悔しいね。
喉から手がでるほど・・・欲しいもの。
「1つだけ頂きます。」
持ち金１５００Gの内、１２００G差し出して石を受け取る。
「いえ、お代は結構でございますので・・・」
「そうはいきません。ではこれで。」
はぁ、意地を張らなければいいのに。
でも、あそこまで言われちゃ、引き下がれないよ。
みんなの視線を背中に感じて、退散！
工房に帰ってからすぐベッドの中に入った。
ご飯を食べる気にもならない。
「ねぇ、セフィ」
「・・・・・」
「セフィってば。」
「・・・・・なに？」
「せっかく石を買ってきたのに。作らないの？」
「そんな気分じゃない。」
「時間かかるんでしょ？」
「だったらあなたが作ればいいでしょ！」
「僕じゃ無理だよ。」
「今日はもう寝るの！」
「また、間に合わなくなっちゃうよ？」
「うるさいなぁ。だいたいあなたがバレスター商会に行こう何て言

い出さなければ良かったのに！」
「しょうがないよ。ほかの道具屋には無かったんだから。」
「だからってあんなに高いの買ってたら、商売にならないじゃない！」
「でも、注文受けちゃったんでしょ？。」
「他にも道具屋はあるでしょ！」
「買っちゃったんだからさ。」
「何よ！シフォンが女の子に見とれてふらふらしなければ良かったのに！」
「何さ！セフィが意地張らないで、素直にもらっておけば良かったのに！」
・・・・後は言いたいこと言って、シフォンがあきれてどっかに行っちゃっておしまい。
はぁ～。まいったなぁ。

第3話：珍客万来？！

～夜中～
ガサガサ・・・・カタ・・・
「・・・・ん～・・・・・」
・・・・カタ・・・・・カサカサ
「ん？・・・・」
・・・・ガタッ・・・
「え？何だろ？」
工房の方から音がする・・・・
・・・カタカタ・・・カタンッ・・
「う〝・・・なんか居るのかなぁ・・・」
・・・・・
「シ、シフォン・・・じゃないよね？」
・・・・キィ～・・・・パッタンッ・・・・
「？！今ドアが閉まったよね？！」
急いで工房に行ってみる。
「え～？！」
泥棒だ・・・・
あっちこっち荒らされて・・・・
急いでドアを開けて表を見ると・・・・
「はぁ～、誰もいないかぁ・・・」
まいったなぁ。なに盗られちゃったんだろう？
「セフィ・・・どうしたの？」
「あ、シフォン・・・」
「もしかして・・・泥棒？」
「あんまり信じたくないけどそうみたい。」
「何盗られたの？」
「まだわからない。・・・・とりあえず片付けなくっちゃ。」

「うん、そうだね。」
まったくぅ。夜中に片付けするとは思わなかったなぁ。

「えっと・・・これはこっち・・・と」
こうしてみるといろいろ物持ちだったんだね。
「セフィ、これは？」
「あ、その籠に入れておいて」
シフォンも手伝ってこれてる。
「あむ・・・・・っと」
手伝ってるとはいえ、くわえられる物だけだけどね。
「はぁ、こんな物もまだあったんだ。」
「何？・・・へぇ～、懐かしいね」
私が小さい頃に付けてた日記。
ふふふ、シフォンのことが書いてる。

『4月13日
きょう、シフォンがビンをわってママにおこられた。かわいそう。』

「そうそう、こんな事もあったよね～」
「そうだっけ？」
「そうだよ、ママの大事な薬の瓶だったんだもの。」
「ふぅ～ん・・・っと、そんな事より、早く片付けないと。」
「あ、そうね。」
先は長そう・・・

「いててて・・・放してくれって！」
表で声がする。
何だろう？
「早く入れよ！」

「わ、わかった！わかったから放してくれって！」
「駄目だ、放したら逃げるだろう。」
「そんなことしねぇよ。な？」
「盗人の言うことなんか信用ならねえんだよ。」
・・・なに？・・・・
ガチャ
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「あ、あの～」
怪しいおじさんが、小さな男の子に後ろ手に縛られて入ってきた。
「・・・・・」
「ほら、盗ったモンだしな！」
ボフッ
男の子が、おじさんのお尻を蹴り上げた。
「ヒ！いってぇ～」
「あ、あの～、何でしょう？」
「あぁ、このおやじがな、ここに盗みに入ってよ」
「はぁ」
「ほら、出しなって！」
ボフッ
「は、はいぃ～」
おじさんがポケットからなにやら出した。
「あ、その石・・・」
アリタニーヤ河の石だ。
「これはあんたのモンだね？」
「う、うん・・・」
間違いない。
昼間買ったヤツ。
「間違いないな？」
「うん・・・」

でも・・・・割れちゃってる・・・・・
「やっぱりそうじゃねぇか！盗ってねぇなんて言うんじゃねぇよ！」
ボフッ
「ひぃ！」
「あ、あのぉ・・・・」
「あぁ、たまたま見つけたのさ、こいつがここからこそこそ出てくるのをな」
そうじゃなくって、石がね・・・
「いや、だから、それは・・・・」
「まだ言い訳すんのか？」
ボフッ
「ヒッ！」
「怪しいな、と思ってこいつの後を付けていったら逃げたから追いかけたんだ。」
「あ、あんたが追いかけてくるから逃げたんだよ。」
「やましいことねぇんなら、逃げねぇよ！」
ボフッ
「フィ！」
「んで、問いつめたら白状したって訳だ。」
「はぁ」
「い、いや、ほんと、盗るつもりはなかったんだ。」
「じゃぁ、何なんだよ。」
「いや、だから、つまり、その・・・・・」
「言い訳なら聞かねぇよ。」
駄目だ、いつまでたっても気づいてくれない。
「あのね、これ。」
割れちゃったアリタニーヤ河の石を指さす。
「割れちゃってるの。」
「え？」
「これ、家にあったときは割れてなかった。」

「あ、あんたが追いかけてきて、と、飛びついたときに・・・割れちまったんだよ」
「え？おれ？」
男の子が石を見に来る。
「あちゃぁ、まっぷたつじゃねぇか・・・。この石、大事なモンか？」
「うん・・・昨日買ってきたの。アリタニーヤ河の石って言うんだけど。」
な～んて、話しをしてたら、さっきのおじさん、いなくなっちゃってるよ。
「あ、おじさん・・・居ない。」
「え？！あ、あの野郎！」
男の子が外に飛び出す。
「まちやがれ！くそおやじがぁ！」

はぁ、何でこんなことばっかり・・・・
やんなっちゃうな、もぅ

ガチャ
男の子が帰ってきた。
「おじさんは？」
首を横に振る男の子。
「そう、しょうがないわね。」
「その石、高いんだろ？」
「・・・うん・・・」
「・・・・・」
落ち込んでてもしょうがないよ。
「ありがと」
「へ？」
「もう、あのおじさんも悪いことはしないよ。」

「でも、この石・・・」
「いいの、これは。しょうがないモン。また買ってくるよ。」
「・・・・くっそぉ」
「???」
「全く役に立たねぇなぁ、俺は！」
「そ、そんなことないよ！」
どうしちゃったんだろ？
「申し訳ねぇ、なんかお詫びさせてくれ。そうじゃなきゃ、俺の気がすまねぇんだ。」
「そ、そんな事いきなり言われても・・・・」
「あ、そうだ。ここの用心棒としてしばらく置いてくれねぇか？もちろん金はいらねぇ」
えぇ？！ど、どうしよ・・・
「え？こ、困るよぉ。それに、君の家族だって心配するし・・・」
「大丈夫。家には冒険に行くって言って出てきたところだ。どうせ行く当てもないんだしな。」
「そ、そぉなんだ・・・・」
う～ん。追い返す理由がない・・・
「俺はジャニス。ジャニス・バニーナってんだ。よろしくな。」
「あ、私はセフィア・・・」
「よろしくな。」
訳の分からないまま、ジャニスは家の用心坊さんになっちゃった・・・

第４話：メンバー追加？！

～そしてあの朝～
「ぅ～ん・・・また寝坊しちゃった・・・」
朝だ・・・
なんだか寝た気がしないね。
結局、レオンさんに会いに行ってないなぁ・・・
そして毎朝のばたばた
あ、そうだ。昨日泥棒に荒らされたまんまだ。とりあえず工房の片付けしなくっちゃ。

「うわぁ・・・」
きちんと片づいてる工房。
こんなにきれいな工房、久々だ・・・。
そして床に転がってる・・・ジャニスだ・・・
「ね、ちょっと。」
揺すってみる。
・・・起きない。
「ジャニス、ってば。起きて。」
「・・・あ、あぁ、おはよう。いけねぇ、こんな所ですっかり寝ちまった。」
「ここ、片付けてくれたの？」
「あ、あぁ。その位はしないとな。」
「ありがと。前よりきれいになったよ。」
「へへへ、片付けんのは得意なんだ。お袋にいっつもどやされてたからよ。」
「ふふっ、そうなんだ。お母さん、怖いんだね。」

グゥ～
あたしのお腹が鳴った・・・・
「お、お腹空かない？」
「あぁ、そうだな。腹減ったな。」
「ちょっとまってて。今何か作るね」
「ありがたい。」

いつもの朝食のメニュー
ライ麦パンと特製ジュース、サラダ。
特製ジュースって言うのはいろんな果物の果汁をフィールウォーターで割った物。
シフォンにはミルク

「ふ～、ごちそうさん。」
「お口にあったかな？」
「あぁ、大丈夫。こんなうまいモン、久々に食った気がするよ。」
「ふふふ。」
そう言えば、ジャニスのことまだよく知らないな。
「ね、ジャニスのこと教えてよ。」
「あぁ、まだたいした自己紹介もしてねぇな。俺の家はガリアレって言う小さな村の南のはずれでよ、牛飼ってるんだ。ミルクを絞って売りに行くのが商売さ。今は兄貴と親がやってる。俺は昔っからいやだったんだ、あの商売。１８になったら冒険家になってやるって決めてたから、家を出てきたって訳だ。」
え、同い年なんだ・・・もっと小さいかと思ってた・・・
「反対もされなかったしな。んで、冒険に行くのにどうすりゃいいのか調べるんで、この町に来たって訳よ。ここまで歩いてきたら夜中になっちまってな。寝床を探してたまたまここの前を通ったら、あの盗人に出くわしたって訳だ。」
「じゃ、冒険家って言っても成り立てのほやほやなんだ。」

「ま、まぁな。いけねぇか？」
「ううん、そうじゃないの。私も精錬術師になってまだ少しだから、似てるな、と思ってね。」
「そうか、じゃ、初心者同士仲良くやろうな。」
「そうね。宜しく。」
ジャニスとはうまくいきそうだね。
「ねぇ、セフィ。アリタニーヤ河の石買いに行かないと間に合わなくなっちゃうよ。」
「あ、そうね。」
あれ？ジャニスが変な顔してる・・・
「・・・ネコがしゃべりやがった・・・・」
「あ、ごめん。驚いた？」
「あぁ、しゃべるネコなんていねぇからよ」
「この、首に付けてるファントマのおかげでしゃべれるんだよ。」
「この石っころでか？」
「そう、これは私のママが作ったんだけどね。」
「あぁ、そうか。精錬術ってのは女家系なんだよな。」
「そ、女だけは遺伝するの。」

カチャ・・・
「すいません」

「あ、お客さんだ。その辺でゆっくりしてて。は～い！今行きますぅ！」
「おい、ネコ。よろしくな。」
「僕はシフォン。よろしく・・・」
「シフォンか。かわいい名前だな。おまえ、ジャイアントブラックだろ？」
「うん・・・小さいけどね・・・。」
「何だ、小せぇことを気にしてんのか？俺だって小せぇけどな。気

になんてしてねぇぞ。小せぇ方が良いときだってあるんだ。」
「そうだよね。うん。」
「ははっ、おまえとは話が合うな。チビ同士頑張ろうぜ。」

「いらっしゃいま・・・・あ・・・」
レオンさんだ！・・・いきなり心臓がどきどきしてる。
「おはよう。いつまでも公園に来ないから、探してきてしまった。迷惑だったかな？」
「い、いえ。そんなことないです。」
「それならよかった。今は、忙しいのかい？」
「いえ、大丈夫です！」
アリタニーヤ河の石は、ちょっと休憩。
「そう、・・・ちょっと相談に乗ってもらいたいんだけど。」
「はい！」
「じつは・・・」
取り出したのはあの剣。火の泉が召還されている剣だ。
「こいつの事でちょっと相談したいんだ。」
「何でしょう？」
「この剣は、士官学校に入ったときに爺さんの形見分けとしてもらった物なんだ。その頃から火の泉が召還されているらしい。」
確かに、言われてみれば１００年位前の物かもしれない。最近造った物とは違う、良い意味で年を重ねている剣だ。手入れが良いからかな？古びた感じはない。
「これは親父も使っていた物なんだが、俺がこれを引き継いだんだ。」
「それで・・・相談ていうのは？」
「あぁ、この剣を僕に合わせて精錬し直してほしいんだ。」
「っていうことは・・・」
「そう、この剣を、君に任せたい。」
「え、そ、そんな。無理です。そんな経験ないし・・・」

他のお客さんだったら受けてたかもしれない。
でも、レオンさんの剣は・・・・
とってもうれしいけど、絶対失敗できないよ・・・・
「君の腕を見てきたんじゃないんだ。君を見てきたんだ。」
「??え??」
「う～ん・・・なんて言うかな。君の血を信じてきたって言った方が良いかな?」
「・・・・」
「実は、フレストーム小・・・じゃなかった。お父上にお聞きしたんだ。君の母上は使い手に合わせた精錬がとてもうまいって言うことを。君にもその素質はあるって言ってたし。」
もぉ、パパったら勝手なこと言って。
「確かに私のママはその辺がうまいっていっつもパパは言ってたわ。でも、そんな力は私にはないかもしれないし、第一剣はやったことがないもの・・・・」
「やってみたいとは思わないかい?」
「それは・・・やってみたいけど。」
「それなら決まりだ。君の良いようにやってもらって構わない。費用は必要な分はすべて払う。時間はいくらかかっても構わない。結果はどうであれ、君にやってもらいたいんだ。」
「う～ん・・・」
どうしよう・・・・
「実は・・・父上からの要請でもあるんだ。やるんなら娘の所で頼むって。」
「えぇ～・・・」
もぅ、パパはすぐ調子のいいこと言って。
「そう言う訳なんだ。もちろん僕もやってもらえるんならありがたい。父上から言われたからじゃない。僕の意志なんだ。」
「どんなになっても知らないよ?」
「構わない。」

「ふぅ～、わかったわ。やるだけやってみる。でも、期待しないでね。」
「ありがとう。それで、手伝えることがあったら言ってくれ。剣がない間は登城しても意味がない。いつでもヒマだから。」
「え・・・それじゃ・・・・」
「大丈夫。上官からの命令だから。その間の給料はちゃんと出る。」
「そっか。わかったわ。」
「宜しく頼む。」
「えぇ、解ったわ。」

2人を物陰からそっとのぞいている1人と1匹・・・

「なぁ、シフォン。あいつは知りあいか？」
「う～ん・・・知りあい・・・だね。」
「恋人か？」
「いや、ただの顔見知り。」
「そうか。」
「あ、もしかしてセフィのこと・・・」
「ちがわい！」
「あ、そうなんだ・・・」
「なんだよ・・・」
「今、セフィの頭の中はレオンさんで一杯だよ。」
「だからどうした。」
「ジャニスの入る隙間はないって事」
「そんなこと聞いてるんじゃねぇよ。！」
「ふ～ん・・・」
「人間のことわかったような口聞くな！・・・でも、あいつはやり手だな。」
「そうだね、女性ファンは多いと思うよ。」
「そっちじゃねぇ。剣の方だ。」

「あぁ・・・」
「あの剣はな・・・ま、イイや。おまえに説明してもわからねぇ。」
「何だよ、ネコだと思ってバカにして・・・」
「ネコは剣を持てねぇだろうが！」
「人間の考えてることくらいわかるモン！」
「何だとこのチビが！」
「何さ！このチビが！」

「ちょっと、お二人さん？何してるの？」
明らかに盗み聞きをしていた2人に問いつめるセフィ
「あ、いや・・・ちょっと・・・ね・・・すまん」
「もぉ・・・けんかしてるヒマがあったら、アリタニーヤ河の石を買ってきて！」
「あ、あぁ、わかった。ほら、行くぞ、シフォン！」
「はいはい・・・・」
「んもぉ・・・」

第5話：勘違い…

「ただいまぁ」
「あ、お帰りなさい。早かったわね。あった？」
「あぁ、その辺の道具屋にごろごろしてたぜ」
「えぇ・・・何で・・・」
「さっきシフォンから昨日のことは聞いたよ。そう言うこともあるさ。ま、頑張って造ってくれ。えーっと、なんだっけ、何とかの卵・・・」
「うん、妖精の卵ね。頑張るわ。」
「店番は任せとけ。これでも多少は接客やったことあるんだ。」
「そう、わかったわ。そうしたら・・・・値段はこれに書いてあるから。シフォンも手伝ってあげて。何かあったら奥にいるから。」
「わかった。」
ジャニスが居てくれて助かったね。
頑張って造らなきゃ、明日までだもの。

ジャニスが工房に来る
「おぅ、セフィ！」
「・・・・・ちょっと待って・・・」
「・・・あぁ・・・」
「・・・・あぁ、やっぱりだめだ。・・・何？」
「お客さんみたいなんだけど、セフィに用があるって。」
「え、誰？」
「さぁな。黒いマントのおばさん」
「えぇ～。そんな人知らないよ。」
「でも、『セフィ、いる？』って。用事を聞いても直接じゃないと言えないってよ。」

「解った・・・」

「はい・・・あ、ママ！」
「あ、セフィ。元気にやってるみたいね」
「どうしたの？急に。パパは？」
「私1人よ。パパは仕事。」
「連絡くらいくれればよかったのに。」
「ちょっと別の用で近くまで来たから寄ってみたの。良いお店じゃない？」
「へへ、ありがと。頑張ったんだよ。」
「順調？」
「まぁ・・・ね。」
「何か作ってた所じゃなかったの？」
「あ、そうだ。今、妖精の卵を造ってるの。」
「へぇ、進歩したわね。そこまで作れるようになったなんて。」
「う～ん。でも時間ばっかりかかっちゃって・・・」
「最初はしょうがないわよ。工房見せてもらっても良い？」
「うん！」

「へぇ、あなたには珍しく綺麗にしてるじゃない。」
「う、うん・・・」
まさか今日だけ綺麗だなんて言えないよ。
「どう？うまくいってる？」
「うん・・・アリタニーヤ河の石からうまくエレメントを出せないんだ。」
「ちょっとやってごらんなさい？」
「うん・・・」
石に手を乗せて・・・・だんだん暖かくなってきた・・・
「だめだめ。」
「え？」

「それじゃママでも出すのは大変よ。アリタニーヤ河の石はね、目があるの」
「目？」
「そう。ここから光をかざして・・・・ほら、このあたり。解る？」
「え？どれ・・・・？？」
「ここに、こう・・・筋が見えるでしょ？」
「あ、うん・・・」
「この筋に沿って取り出さないと、なかなか出てきてくれないの。」
「ふ～ん」
「さ、もう1回。頑張って。」
「うん」
目の向きを考えて、もう一回・・・
あ、簡単にするっと出てきた。
「そうそう。何でも力づくでは駄目なの。力でやろうとしては反発するわ。エレメントの力に逆らってはダメ。素直にやってあげるの。」
「そうか・・・うん。ありがと」
「頑張ってね。ちょっとは安心したわ。元気でやってるみたいだしね。」
「うん！元気だけはね」
「ふふ、いい人も見つかったみたいだし・・・」
ジャニスの後ろ姿を見ながらママ。
「ち、ちがうよ。ジャニスは・・・」
「ジャニス君ていうんだ。かわいいじゃない。ママも嫌いじゃないわよ。ああいう子。」
あ、勘違いしてる。
「じゃ、私はもう帰るわ。」
「送っていこうか？」
「いいわよ、仕事があるでしょ？」
「あ、うん・・・」

「じゃ、頑張って。」
「うん、ありがと。今度来るときはちゃんと連絡して。」
「わかった。今度はパパも連れてこないとね。たまにはこっちにも来なさい。」
「はーい。」
「それじゃ」
「ジャニス君、出来の悪い娘ですが宜しくね。」
「あ、はぁ・・・」
・・・・完全に勘違いしてるね。

～夜～
「ねぇ、セフィ・・・」
「・・・・・・ん・・・・」
「セフィってば・・・」
「うん・・・・」
「セフィ！」
「ほぁ？あ、シフォン。」
「あ、じゃないよ。出来たの？」
「うん、もうちょっと・・・おやすみ・・・」
「ちょっと、セフィってばぁ」
「いいよ、寝かせておけ。」
ジャニスが毛布を持ってきた。
「んな所で寝たら風邪ひいちまうぜ。」
「ジャニスもここで寝てるじゃない。」
「バカ、俺は鍛え方が違うんだ。」
「あぁ、バカは風邪引かないってヤツか。」
「こら、ここで争いは禁止だ。睡眠妨害は重罪だぞ」
「わかったよ。」

「しょうがねぇ、俺がメシ造ってやるよ。」
「食べれる物？」
「当たり前だ。びっくりして腰ぬかすぞ。」
「ふーん。楽しみにしてるよ。」
「あぁ、おとなしくそこで待ってな。」

「ふぁ、・・・あ、なんかいい匂い・・・そう言えば、お腹空いたな・・・」

「お、起きたな。」
「あ、ご飯つくってくれてるの？」
「あぁ、期待して待ってな。ジャニスシェフがおいしいモン造ってやっからよ。」
「あ、うん・・・」
へぇ、ちょっと以外・・・
料理なんか絶対しない人だと思ってたのに・・・
人は見かけによらないね。
「さ、あっちに行った。見てられると仕事がはかどらねぇや。」
「うん・・・」

「あ、セフィ。起きたの。」
「うん、おいしそうな匂いで起きちゃった。」
「匂いだけはおいしそうだね。」
「どんな物が出来るんだろ？」
「さぁ？」
シフォンと2人で食事を待つ・・・工房を始めてからはなかった光景。
なんだか落ち着かないね。

「あ、そうだ。これ。」
シフォンがテーブルの上の袋を指した。
「何？」
袋を開けてみる。
お金と、メモ。
メモを見る。
「・・・今日の売り上げの明細だ・・・」
「セフィは作ったことないでしょ・・・」
「うん・・・」
「ね、ジャニスって結構几帳面な人？」
「うん。少なくともセフィより几帳面だね。」
「何よ。それじゃ、私がいい加減な人みたいじゃない。」
「間違ってないと思うよ。」
「もぉ。」
とは言っても、まねできないなぁ・・・
「もっといい加減な人かと思った・・・」
「うん・・・確かに。」

「お待たせ！」
ジャニスが料理を運んできた。
いろいろ入ったスープにパン。
メニューは至ってシンプル。
「わぁ、いい匂いね。」
「バニーナ家特製シチューだ。これは・・・っと、おまえ用に冷ましておいたからな。」
シフォン用のもあるんだ・・・
「いただきま～す。」

「うん！おいしい！」
「セフィには出来ない料理だね。」

「う、うん・・・」
「ははは、そんな事ねぇよ。誰にだって作れるさ。」
「そう、じゃぁ、今度作り方教えて！」
「あぁ、かまわねぇ。」

「ふぅ～ごちそうさまでした。」
「いやぁ～食った食った。」
「うん、おいしかったね。」
「ね、ジャニスってさ。」
「あ？」
「見かけによらないね。」
「何だよ、そりゃ。この見てくれで料理したら変か？」
「う～ん・・・最初はね、もっと雑でいい加減な人かと思ったの。」
「け、悪かったな。こんな見てくれでよ。」
「あ、違うの。う～ん・・・なんて言うのかな・・・」
「まぁ、しょうがねぇよ。この辺じゃどうか知らねぇけど。俺の田舎じゃ、兄弟多いから何でも1人でやらなきゃ生きて行けねぇんだ。何せ俺も6人兄弟だしな。だから、一通りのことは出来るようになっちまう。それに言葉遣いも荒い。」
「そうか・・・」
「まぁ、悪い気はしねぇよ。誉めてくれてるんだろうからさ。」
「うん！そうだよ。」
「ははは、まぁ、居候させてもらってるんだ。これくらいはやらないとな。」
「ふぁ～っ・・・はぁ、なんか眠い・・・」
「しっかり休まねぇと、いい仕事できないぜ。後は俺が片付けておくから、あんたはもう休みな。」
「え、いいよ。悪いもの。私も片付けるよ。」
「メシ代と、宿代だ。気にするな。」
「そう、それじゃ、後は宜しくね。」

「あぁ」

ふぅ・・・

第6話：選択・・・

～翌日～
ジャニスは店番。セフィは工房。シフォンは昼寝。
最近の日常・・・
キィ～・・・・・パッタン
「らっしゃ・・・」
う、わ、女冒険しかよ・・・・
「あら？セフィアは？」
・・・・・・・
「ちょっと、あなた。聞いてる？」
「あ、あぁ、セフィなら奥にいますよ。な、何か？」
「前に注文を御願いしていた者なんだけど。」
「あぁ、妖精の卵っすね。」
「えぇ。」
「ちょっと待っててください・・・」

「おぅ、セフィ。お客だ。」
「あ、はい。」
「妖精の卵、取りに来たってよ。」
「うわ・・・・・今行くね。」
「あぁ」

「もうちょっとね、待っててて下さいって。」
「そう。・・・あなた・・・セフィの・・・」
「いやぁ、ただの店番でさぁ。」
「・・・そうなの。」
「お客さん・・・どこか冒険に行くのかい？」
「そのつもりよ。冒険者だもの。」

「1人でか？」
「1人じゃ、いけないかしら？」
「いや、あんたみたいのが1人じゃ・・・」
「女だから？」
「まぁ、それもある。ただ、男だってパーティー組んで冒険に行くぜ。」
「誰かいい人がいれば一緒に行っても構わないわ。」
「なるほど。ってぇ事は、俺が入る余地もあるって事だな。」
「へぇ、坊やも冒険者になるの？」
「坊やって呼ばれるほど若くはねぇぞ。それに今は一応冒険者だ。」
「そう。考えておくわ。」
「あ、すみません。シェーンさ・・・ん・・・・お取り込み中？」
「いや、かまわねぇ。」
「あ、そぅ・・・」
「あのぉ・・・実はですね。」
「どうしたの？？」
「実は、まだ出来てないんです。すいません。」
「あら、困ったわね。」
「すみません。何とか明日までには・・・。お代は結構ですので。」
結局昨日はそのまま寝ちゃったしね。
「この間のバレスター商会の騒動、知ってるわよ。私もちょうどあそこにいたから。」
うわ・・・イヤなところ見られちゃったなぁ・・・
「え！あ、・・・・で、でも」
「ちょうどあの時はアリタニーヤ河の石がどこにもなかった。」
「そうです・・・けど・・・」
「時間がなかったけど注文を受けてしまった以上は造らなければならない。」
「・・・・」
「でも、間に合わなかった。っていうこと？」

「えぇ。でもそれはお客様には関係のないことです。」
「ふふ、確かにそうね。そういう1本気な性格、嫌いじゃないわ。」
「あ、はい。ありがとうございます・・・」
「明日、商品と引き替えに代金を払うって言っても受け取ってもらえないでしょうね。」
「え、あ、はぁ・・・」
バレスター商会の事を見られてたからなぁ・・・
「いいわ、明日まで待つわ。」
「あ、ありがとうございます。」
「ただし、条件付きよ。」
「はい・・・」
「明日までに完成させて代金を受け取るか。そうでなければ・・・」
「???」
「ペナルティーとして用心暴君が私と一緒に冒険に来る。」
「へ?」
「あ?」
どうしてそうなるの?
おれは用心棒なんて言ってねぇぞ?
「今度冒険に行こうかと思ってるの。その時、あなたの用心暴君を私のパーティーに加える。」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺の意見も聞かずに・・・」
「あなたにはさっき一緒に行くかって聞いたはずよ。」
「・・・あぁ、確かにな。」
「じゃ、決まり。報酬は取ってきたアイテムの3割をお支払いするわ。後はそっちで決めてちょうだい。」
「おいおい、ちょっと待ってくれ。おれはここの店の用心棒だ。俺が居なくなったら困るだろう。なぁ、セフィ。」
「え?」
まぁ、確かに・・・いろいろ便利だし・・・物騒だからねぇ。
「えぇ、まぁ。」

「そう・・・じゃ、こうしましょう。セフィも一緒に来たら？」
「え？！わ、私も冒険にですか？！」
「そうよ。」
「無理ですよ。第一戦闘経験なんてないし、冒険に行っても何も出来ないし・・・」
「あら、そんなことないわよ。私ね、前から考えてたんだけど、パーティーに精錬術師が居たら冒険が楽になるな、って。」
「そ、そうですか？」
「そうよ。足りなくなったアイテムを現地調達できるし、使い手が進歩して合わなくなった武器をその場で精錬し直すことも出来る。」
「あぁ、なるほどな。確かにそうかもしれねぇ。」
「ちょ、ちょっと、ジャニスまで何言い出すのよ。」
「イヤ、この人の言ってることはまんざらでもねぇよ。」
「あら、飲み込みが早いわね。坊や。」
「坊やじゃねぇ。ジャニスだ。」
「ジャニスね。解ったわ。私はシェリル。宜しくね。」
「あぁ。」
「じゃ、明日来るわ。その時までに考えておいて。」
「あ、あ、ちょっと・・・」
キィ～パッタン・・・
「はぁ～どうしよう。そんなこと急に言われてもなぁ・・・」
確かに良い経験になるんだろうな。すごく行ってみたい・・・けど・・・
「悩むことねぇよ。いいじゃねぇか。一緒に行こうぜ。」
「う～ん・・・・」
でも、いつも来てくれてるお客さんも出来てきたし、それに・・・
「悩んでても始まらねぇよ。」
「うん・・・・」
レオンさんの剣・・・どうしよう・・・。

「どうするの？セフィ？」
「う～ん・・・・どうしたらいい？」
「悩んでるのはレオンさんの事だろ？」
「う・・・・」
どうして解るんだろ・・・・
「顔に出てるよ。レオンって。」
「もぅ、からかわないでよ。」
「レオンさんに聞いてみたら？」
「う・・・ん・・・」

もうそれから仕事は手つかず・・・

工房の扉の陰からのぞく1人と1匹・・・
「なぁ、シフォン。セフィは何をあんなに悩んでるんだ？」
「さあね。本人に聞いてみたら？」
「あの状況で聞けるわけねぇだろうが。」
「セフィのことが心配？」
「いや。俺の身の方が心配だ。あれじゃ人身売買だぜ。奴隷じゃねぇのによ。」
「そうだね。」
「セフィが行くとしたらおまえも行くのか？」
「当然でしょ」
「運命共同体か？いいな。俺もネコになりてぇよ。」
「ジャニスじゃ野良猫止まりだね。」
「うるせぇや。」

「はぁ・・・どうしよう。」
レオンさんの剣を見つめながらため息ばかり
「うん、悩んでても始まらないよ。」

「ちょっと出かけてくる。お店おねがいね。」
「あ、あぁ・・・」

「なぁ、あんなでっけぇ剣もって、どこに行くんだ、セフィは？」
「持ち主に会いに行くんだよ。」
「あ、あのレオンってヤツか。」
「ひがんでるの？」
「んな訳ねぇよ」
「そぉ・・・」
「んだよ、その目は。そんなことねぇって。」

～セントラルパーク～
「ふぅ・・・」
レオンさんと初めてあった公園のベンチ。気が付いたらここに来てた。
もう太陽は頭の真上まで来てる。
「・・・でも・・・」
なんて言おうか？
冒険に行くから、この剣はお返しします。って？
レオンさんならなんて言うのかな？
でも、この剣もやってみたいし、冒険にも行ってみたいしなぁ。
「はぁ・・・」

「お嬢さん、ここ、よろしいかな？」
「あ、はい・・・」
なんだろう？麻のマントを羽織ったおじいさん。
杖をついて・・・・

「愛する人の剣、重たかろう。」
「あ、いえ・・・見た目ほどではないです。」
「いやいや、そうではない。心の重さじゃよ。」
「は、はぁ・・・」
「あなたの愛する人は、帰ってくるやもしれぬが、それは誰にもワカラン事じゃ・・・」
・・・・あ！そういえば・・・・
誰かに聞いたことがある。戦に出る兵士は愛する人に自分の剣を預けるって。
愛する人に自分の分身として剣を預ける。無事に帰ってこれるおまじない・・・・
・・・いきなり恥ずかしくなっちゃった・・・
「あなたの心が届くことをお祈りいたしますぞ。」
「・・・・」
「では、これで。お邪魔しましたな。」
「い、いえ・・・」
間違えられちゃったけど・・・ちょっとうれしい・・・かな？

そのベンチの後ろの木陰
「誰待ってるんだ？」
「たぶんレオンさんだと思うよ。」
「ここでいつも会ってるのか。」
「最初に会ったのがここだからね・・・」
「んじゃ、待ってたって会えるかどうかわからねぇじゃねぇか・・・」
「う～ん・・・あ！」
顔を引っ込める1人と1匹・・・

「あぁ、ここに居たのか。」

「あ、レオンさん！」
うわぁ。急でびっくり！
「今、工房に行ってみたんだ。そうしたら臨時休業になってたから・・・」
「へ？！」
ジャニスとシフォンは？？？
・・・・・・・・

カサカサカサ・・・・
後ろで物音・・・
全くあの2人は・・・・・

「す、すみません。実はレオンさんに相談があって・・・」
「なんだい？」
「え、えぇ・・・」
ど、どうしよう・・・・
「私の剣の事かな？」
「はぃ・・・・」
「言いにくいことなんだね。」
「・・・・・・」

「あのぉ・・・私が冒険に行くって言ったらどうします？」
「冒険かぁ。」
女の子が行くモノではない、とか言うのかな？
レオンさんに止めてもらえるならそれで良いし・・・
「良いんじゃないかな。自分の意志で行きたいのであれば。」
「え？えぇ！」
「なんだい？止めるかと思ってたのかい？」
「えぇ・・・だって・・・」

「君が行くって言うのであれば止めはしないさ。ただし、条件が１つ。」
「はい・・・」
「私を連れて行くことだ。」
「！！！！」
そうなんですか？
「ははははは！いや、実はね、父上から言われていたんだ。何があっても守ってくれと。」
「え？あ、はぁ・・・・」
どうしてパパったらそうなんだろう？
「それで良いかな？」
「え、えっと。それで…」
「実践で使いながらその剣を精錬してくれればいいさ。その方が私も調整しやすいしね。」
「あ、あぁ…　そですねぇ…」
「それじゃ、明日。店に行くよ。」
「はい・・・」
ますます大混乱だね・・・・

第7話：大決心！大波乱？

～夜～
「・・・・・ダメだぁ・・・・・」
全然うまくいかない。
妖精の卵の最後の仕上げ。
一番集中しなきゃいけないのに、頭の中がぐちゃぐちゃで全然集中で来てない。
「ふぁ・・・・もう、外が明るくなってきたよ。」

～翌日：工房～
「・・・と言うわけで、このメンバーで冒険に行くことになりました。」
「そう。私は一向に構わないわ。そちらの坊やと兵隊さんがよろしければね。」
「坊やじゃねぇ。ジャニスだ。」
「私としても構わないよ。お嬢さん。」
「あら、結構なご挨拶ね。兵隊さん。」
「あ、あ、あの・・・」
「・・・・」
「とりあえず、仲良くやりましょうよ・・・パーティー組んだんだから・・」
「イヤなこった！」
「いや、私は構わないよ。」
「ふふふ・・楽しくなりそうね。」
はぁ。なんだか先が思いやられるな。
「ね、自己紹介しましょうよ！ね！改めて、セフィです。セフィア・フィレストーム。精錬師やってます。冒険は初心者ですが、宜しくお願いします！」

「ファレリア王立軍装甲兵隊第2師団ファレリア城警備担当のレオン・ファスターだ。以前から冒険には行ってみたかった。セフィと同じく初心者だが、宜しく頼む。」
「・・・ジャニスだ。ジャニス・バニーナ。一応冒険家だ。まだ冒険の経験はないけどな・・・よろしく。」
「シェリル・ガードナーよ。よろしく。シェーンって呼んでもらって結構よ。冒険の経験は一応この中じゃ1番だと思うわ。あまりパーティーを組んで冒険に行かない方だけど、たまには良いかも。パーティーを組むなら各自の役割を決めないといけないと思うの。私は剣士だから戦闘専門って事でよろしいかしら？」
「あぁ、構わないだろう。私も補佐をさせてもらうよ。それと、軍の経験を生かして、野営時の警備も担当しよう。もちろんジャニスにも手伝ってもらう。」
「　え？！俺も？んじゃ、俺は警備員か？」
「まぁ、そう言うな。大事な役職だ。一つ聞いておきたいが、目と耳に自信は？」
「ふんっ！任せとけって！これでも家じゃ牛たちの見張役やってたからな。」
「なるほど。少し安心したよ。」
「えっと・・そしたら私は・・・」
「セフィは精錬担当。それだけ。それで十分よ。何か出来るなら手伝ってもらうけど。」
「何かって言っても・・・」
「まぁ、その時になれば色々あるだろう。それからでも遅くはない。」
「シェーン、何かそろえておいた方が良い物はあるかい？」
「そうね。エレメントなんかはセフィにお任せするわ。出来る物を出来るだけ、効率よく。」
「わかったわ。後で書き出してみるから、相談に乗ってね、シェーン」

「ねぇ、ジャニス。あなた・・・ちょっと失礼かもしれないけど、コボルドの血が入ってない？」
「あぁ、入ってる。おかげで背が小せぇんだ。」
「そう、やっぱり。」
「ふん、どうせ鍵開けやってくれって言うんだろ？」
「よくわかったわね。出来るでしょ？」
「悪いな。やったことねぇんだ。」
「そう、それじゃ試してみましょ。セフィ、何か鍵のかかるものないかしら？」
「え・・・っと、これでいいかな？」
「そうね、手始めにこれ開けてみてちょうだい。」
「やってみるか。ご先祖様のためだ！」
小さな宝箱のような箱。私が小さい頃、ママからもらった物。ただの貯金箱なんだけどね。
ジャニスは工房から針金を持ってきた。
「さて・・・と」
・・・・・・カリカリ・・・カリ・・・カチッ
「お、開いたよ！」
「あら、やるわね。」
「へっ、血は争えねぇな。」
「それじゃ、ジャニスは鍵開け担当・・・と。」
「あんまり名誉じゃねぇな。」
「いや、大した技術だよ。」

～夜～

「お待ちどぉさま・・・」
ジャニスに教えてもらったスープ。私が作ってみた。
「おいしそうだね。」

「いただきま～す。」

「いやぁ、ホントにおいしいよ。」
「ありがとう。実はジャニスに教わったの。」
「へぇ、料理も出来るの？」
「なんだよ。黙っててやったのに・・・」
「ごめん。でも、こんなの私には無理だもの。」
「でも、俺が作ったのより上手いよ。」
「ありがとう。チョットアレンジしてみたんだ。」
「冒険に行ったときもお願いね。セフィ。」

だんだんみんながまとまってきたかも・・・

～夕食後～

「・・・と言う訳なの。」
シェーンから冒険のイロハについて講習会。
結構大変かも・・・
「じゃあ、もう1回おさらいだ。モンスターが出てきたら隊形は？・・・」
「シェーンが前に出る。レオンは右、俺は左だ。」
「そう、その時後ろは自分で気を付けてくれ。セフィ。」
「わ、判ったわ・・・」
「ははは、大丈夫だ。そんなに心配しなくても。私たちが付いてるさ。」
「だいたい良いようね。ただ、障害物があったりすると理想的な隊形にはなれないと思うの。それに挟み撃ちにあう可能性もあるわ。その時は臨機応変にやってちょうだい。」
「出来るだけお互い声を掛け合いながら行こう。」
「よし！そうとなりゃいつ出発するんだい？」

「焦らないで。まずは日帰りできるところから行って訓練よ。」
「何処にするんだい？」
「そうね。コムワードの森に行ってみようかしら。」
「良いんじゃないか？距離的にもちょうどイイ。」
「あそこはなんかあるのか？」
「奥の方に『妖精岩』って言うのがあるらしいの。別に何って言う訳じゃないらしいわ。それを見て帰ってくる。まぁ、チョットしたハイキングね。ふふふっ」
「あ、あのぉ・・何か出てくる？」
「えぇ。あの辺りだとコウモリと、スライムくらいでしょう。」
「はぁ・・・」
「大丈夫よ。それじゃぁ明日の朝出発しましょう。ここに集合。良いわね。」
「あぁ、構わない。」
「さて、明日に備えて休みますか。」

第8話：いざ！

「セフィ、まだ～？」
「ちょっと待って。今行く～」

冒険に行く準備って色々大変よね。
何があるか解らないじゃない。
取りあえず持っている中で一番丈夫そうな服を着る。
その上に革のジャケット・・・
足下は革のブーツと・・・
ん・・・重たい・・・・・
でもしょうがないね。

さて、行きますか。

ガチャ・・・

シフォンとジャニスが不思議な顔で立っていた。
時間が止まったような沈黙・・・

「ずいぶん勇ましいな。」
「ねぇ、セフィ。何しに行くの？」
「だって、冒険だよ？何が起こるか解らないじゃない。」
「まぁ・・・な。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～

その頃工房の表では・・・

「あら、ずいぶんと早いのね。」
先に来て待っていたレオンに後から来たシェーンが話しかける。
「あぁ、いつもの城に行く時間に目が覚めてしまった。そういう君もずいぶん早いんじゃないか？」
「一人で出かけるときはもっと早いわ。」
話の続かない2人・・・
「ところで・・・」
「そういえば・・・」
なぜか同時に話し出す2人・・・
「あなたからどうぞ、大した話じゃないわ。」
「いや、お先にどうぞ。私も大したことではない。」
「そう、それじゃ一つ聞かせて。なぜ王立軍に？」
「いや、さしたる理由はない。親父が王立軍の騎兵隊で隊長をやっている。それだけのことだ。」
「そう、それで何故冒険に？」
「君は・・・セフィの父上のことは知っているかい？」
「いいえ、何も知らないわ。」
「そうか・・・セフィの父上も王立軍なんだ。王立軍装甲兵隊ファレリア城警備担当レイズ・フレストーム少将だ。」
「それじゃ、あなたの上官ね。」
「そういうことだ。そのフレストーム少将から直々に行ってくれと言われている。まぁ、私も昔から冒険家になりたかったこともあるからまんざらでもないがね。」

「そう・・・それだけ？」
「な、何のことだい？それ以外に何も・・・」
「それなら良いわ。」
「そ、それより今度は私が聞いても良いかな？」
「えぇ。」
「何故冒険家に？」
「そうね・・・・ちょっと長くなるけど。」
「構わない。まだ時間はあるさ。」

「もう２０年くらい経つかしら・・・まだ私が小さかった頃の話よ。」

そのころシェーンの家族はウトルラ村に住んでいた。
麦や大豆を作っては町に売りに行き生計を立てていた一家は慎ましいながらも平和に、そして幸せに暮らしていた。
シェーンも物心付いた頃から仕事や家事を手伝っていた。

そんなある日、いつものようにシェーンが水場まで水を汲みに行っているときのことだった。
桶に水を汲み、ヤクの背中にくくりつけ家路につこうとしたその時。

「シェーン！シェーン！」

幼なじみの男の子が手を振り上げながら息も絶え絶えに走ってきた。
その表情はただならぬ事が起きたことを物語っていた。

「リュウ！どうしたの！」
「たいへんだ！シェーンの家が・・・お父さんと・・・お母さんが・・・」

荒い息を付きながら何とか喋るリュウの肩を激しく揺らしシェーンが問いただす。

「ねぇ！どうしたの！お父さんは？お母さんは？！」

「・・・・・・」

何も答えないリュウから目をそらしまっすぐに家の方角を見つめる。

「シェーン、今帰っちゃいけない。帰ったらシェーンも・・・あ！シェーン！待ってよ！」

一目散に駆け出すシェーン。リュウにそれを止めるすべはなかった。

「何も考えずに走ったわ。ただ、父と母の無事を祈って。」

「それで、ご両親は？」

決して同情するわけでもなく、無関心なわけでもなく、努めて冷静に質問するレオン。

「死んだわ。モンスターに襲われたんだって村の人はいってたわ。しばらくは涙も出なかった。家で一番大事な家宝も取られていたわ。」

「そうか・・・。」

「慰めや同情はいらないわ。その時村の人にどれだけの言葉を掛けてもらっても、どれにも心はなかったわ。」

「そうだな。その時のシェーンの気持ちは痛いほど解る・・・なんてのはそれこそ嘘だ。私には決して解らない痛みだろう。」

「そうね。結局周りの心ない対応にいたたまれなくなって村を出た

わ。親戚の家を転々としながら・・・何処にいても扱いは同じだったけどね。」

ふぅ、とため息を一つつくと空を見てにっこりと笑った。

「決して敵討ちのために冒険家になったわけではないのよ。そう思われても仕方ないけど。ただ、家宝だったあの石だけは取り戻したいの。」

「そんなに大事だったのかい？」

「解らないわ。ただ、いつも暖炉の所にかっざてあって、それが家族の象徴の様な物だったから・・・かな？」

「そうか・・・」

しばらく考え込んでいるようなレオン

「悪いわね。暗い話になってしまって。」

「一つ大事なことを聞いていなかった。」

「何かしら？」

「シェーンのフルネームは？」

「何？突然不思議なことを聞くのね？シェリルよ。シェリル・ガードナー」

「そうか、やっぱり君だったのか。」

「え？何の事かしら？」

「以前、王立軍からスカウトが行かなかったかい？」

「えぇ、来たわ。ただ・・・」

「やっぱり！君のことは知っていたよ。いや、王立軍なら知らない者はいないと思う。」

「そんな・・・」

「いや、君は有名人さ。セフィの父上からよく話を聞かされたからね。幼くして家族を失った凄腕の女剣士の話さ。何せ、王立軍がス

カウト、ってこと事態が珍しいことなのに加えて、白羽の矢が立ったのは女性だと言うことが前例のないことだそうだ。ましてやスカウトを断ったこと自体が前代未聞だと。」
「だって・・・あの王立軍の人、すごく怖かったし・・・それにあのときはとてもそんな気にはなれなかったわ。」
「あははは、その、王立軍の人、その人がレイズ・フレストーム、セフィのお父上だ。」
「え・・・・・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「セフィ、もうみんな集まってるぜ。表がずいぶん騒がしいや。」
「あ、もう・・・そっか。じゃ、出発ね。」
「あぁ、行こうぜ。」

ガチャ・・

工房のドアを開けて外に出る。
レオンさんとシェーンさんが何か話をしながら待っていた・・・

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」
「な、なに。この沈黙・・・」

二人の目線が何故か冷たいような・・・
「ねぇセフィ。あなた何処に行くつもり？」

笑いながらシェーンさんが聞いてくる。

「え？冒険・・・ですよね。」

「あなた、コムワードの森に行ったことないの？」

「・・・えぇ・・・」

「あそこはね、子供ずれの家族でも行く所よ。もっとも手前の方の話だけど。」

「まぁ、良いじゃないか。冒険に掛ける気持ちはよくわかったよ。」

レオンさんがフォローしてくれる。

そう言われてみれば2人とも軽装。

私だけ張り切りすぎたのかなぁ・・・

「あ、あたし・・・着替えてきますっ！」

あわてて工房に飛び込んだ。

はぁ、バカみたい・・・

第9話：初めての出発

「おまたせ〜」

いつもの普段着に上着を1枚だけ着た。
腰にアイテム袋をぶら下げて、と。
準備完了！

「お、いつものセフィに戻ったな。」
「さて、それじゃぁ出発しようか。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

コムワードの森まではいたって平和な田舎道を歩いていく。
だんだん行き交う人もまばらになり、遠くに森が見え隠れする頃になると、草原の中の1本道になる。
幅は2人が並んで歩くにはちょっとキツイくらい。

「ねぇ、セフィ。」

肩に乗ったシフォンが話しかける。

「なに？」
「喉乾いたよ。」
「もうちょっと我慢しなさいよ、もぅ。」
「だってほら、もう出発してから結構経ってるよ。」
「う〜ん、そういわれてみればそうかな？」
「でしょ？みんな疲れてないのかな？」

「う～ん・・・」

最初の頃はわいわいやりながら歩いていたけど、みんな静かになっちゃったのは疲れたのかな？
少し前を歩いているジャニスに話しかけてみる。

「ね、ジャニス。」
「ぁん？」
「なによ、その寝ぼけたような声は。」
「わりぃ、ちょっとぼ～っとしてた。」
「ね、そろそろ休憩しない？」
「そうだな。そういわれればイイとこまで来たな。」
「そうだね。そろそろ休憩しようか。」
「あ、レオンさんもそう思います？」

あとはシェーンさんだけ。

「ね、シェーンさん。そろそろ休憩しません？」
「そうね、じゃ、この辺でちょっと休憩しましょうか。」
「ありがてぇや。最近歩いてなかったからな。結構答えるや。」
「これも訓練さ。毎日歩けば慣れてしまうよ。」
「あら、お城の警備をするのにそんなに歩くの？」
「いや、歩かない。だから毎日歩行訓練があるのさ。重装備をしょったままね。」
「うへぇ、俺じゃ2日ともたねぇな。」
「大丈夫だよ、ジャニスなら。」
「さぁ、ここの木陰がよさそうよ。」

みんな思い思いに休憩を取る。

「ねぇセフィ。お茶入れてもらって良い？」
「えぇ、良いですよ。じゃ、水汲んできますね。」
「しょうがねぇ、一緒に行ってやるか。」
「お、任務ご苦労！ジャニス警備隊長殿！」

レオンさんがふざけてジャニスをからかう。

「へいへい、かしこまりましたよ。レオン大佐殿！」

しばらく東に行ったところに小川が流れている。
皮で出来た水筒を持ってジャニスと歩いていく。

「なぁ、セフィ。」
「はい？」
「精錬術師って血統だって言ってたよな。」
「そうね、女にしか遺伝しないんだって。」
「それじゃぁ男の精錬術師っていないのかい？」
「うん、そうみたい。」
「そうか、それじゃぁいくらやっても俺には出来ねぇな。」
「うん、男の人で精錬術出来る人って聞いたことないもの。」

話をしている間に小川に到着。
綺麗な水を汲む。

「あ、ここの水って町の水と同じにおいがする。」
「そりゃそうだろ。この水が町に流れて、その水使ってるんだから。
でも、においなんてするか？」

ジャニスが鼻をぴくぴくさせながら聞いてくる。

「うん、においって言うか、肌触りって言うか、暖かさ、かな？まぁ、エレメントの種類だよね。」
「俺には解らねぇよ。」
「そっか・・・」
精錬術出来る、出来ないってのはやっぱり「体質」みたいな物なのかな？
「よしっと。これだけ有れば十分ね。」
「そんなにいらねぇんじゃねぇか？」
「精錬用に少し持っていきたいのよ。この水、使い慣れてる水だし。」
「なるほどねぇ。よし、それじゃ俺が持とう。」
「ありがと。」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ただいま～、遅くなりました。」
「あぁ、ちょうど良いところだった。火の準備が出来たよ。」
「すぐ用意しますね。」
コッフェルに直接茶葉を入れて水を注ぐ。
何滴かエリフィールウォーターも垂らす。
甘み付けにスミレの花を浮かべる。
後はしばらく待つだけ。
「はい、お待たせ。」
「あら、いい匂いね。」
「ウチの特製です。母がいつも送ってくれるの。」

「そう、何処のお茶？」
「さぁ？何処なんでしょ？」
「ま、いいわ。なんかあなたらしいわね。」
誉められてる・・・わけないよね。

第１０話：不安と希望と

しばらく他愛もない話をしながら、くつろいでいた。

「お、奴ら、コムワードの森から来たんじゃねぇか？」

いわゆる「冒険者」スタイルの２人組の男が歩いてくるのをジャニスが見つけた。

「あら・・・」

シェーンが声を掛ける。

「おっ、何処の美人が居るかと思えば、シェーンじゃねぇか。」

「ひひひっ、ひっさしぶり～。元気してた？」

「えぇ、私は元気よ。あなた達も相変わらずみたいね。」

シェーンさんの知り合いなんだ。

「ところでどうしたぃ？こんな所で。ご一行様でお出かけかい？」

「ひひひっ、シェーンがパーティー組むようになるなんて世も末だね。」

「ちょっと、ペレータ。それどういう意味よ？」

「けけけっ、あんたがパーティー組んで行くってぇことは、よっぽどのトコに行くんか？」

「そうだぜ、あんたほどの人と組んでるって事は、この方々も大層なモンだ。」

「あ、あの！お茶どうですか？」

「おっ、いいねぇ。ありがてぇ。頂くとしようか。」

「ひひひっ、パーティー組むならやっぱり女の子がイイよなぁ。なっ、エド！」
「そりゃそうさ、組めるモンならそうしてるって。」
ずいぶんおしゃべりな人たち。
「はい、どうぞ。」
「あ～すまんすまん・・・・・・んっ！んん～っ！！！」
「あ、あ、まずかった？ですか？」
「ん～め～な。これは旨いわ。いや、久々にこんな旨い茶頂いたよ。」
「あ、ありがとうございます。」
「所で一つ聞きたいんだが。」
レオンさんが話に入ってくる。
「おぅ。」
「あなた方、コムワードの森から来たとお見受けするが。」
「そう、その通り。ま、ただ通過してきただけだけどな。」
「また遠くまで遠征に行ってたの？」
「いやぁ、サレルヴェイからこっちに抜けてきただけだ。今回は結構な収穫があってな。」
「ひひひっ、そういうことよ。これからナステリアに行って売りさばいてくるのさ。」
なんかすぐ話がどっか行っちゃう人たちだね。
「あ、あの！コムワードの森。どうでした？」
「あん？どうもこうも。いつも通り平穏無事だわ。昼寝も出来るくらい平和だぞ。」

「くくくっ、なんせスライムも出なかったからね。」
安心したのと、チョットだけがっかり。
「エド、サレルヴェイから来たって事は東から森を抜けてきたの？」
「いや、山を回るのめんどくさいからな。南からきた。」
「南から抜けてスライムも居ないの？」
「あぁ、拍子抜けさ。」
「・・・なんか変ね。」
「やっぱりシェーンもそう思うか。」
「ししししっ、みんな昼寝してたんだよ。考えすぎだって。」
「んで、シェーン。これから何処に行こうってんだい？」
「コムワードの森までお散歩よ。」
「そうかい。でも、又なんで。」
「訓練よ、みんな冒険初心者なの。」
「う〝ぇ？！シェーンが？初心者と組んだの？」
「そうよ。こっちは凄腕の兵隊レオン。こっちは鍵開けの名人ジャニス。そしてこっちは有名精錬術師セフィアとその助手のシフォン。」
「・・・なるほどなぁ・・・冒険は初心者でも、それだけのモン揃ってりゃ言うことねぇや。」
「ひひひっ、あんた精錬術師かい。今度なんかあったら色々頼むわ。精錬術師っていやぁ、ばーさまばっかだからな。」
「そそ、行く楽しみもなくっちゃ。あぁ、そうだ。お近づきの印に・・・これ。やるわ。」
エドさんが袋から出したのは綺麗なエメラルドグリーンの石。
手にとってびっくり！
「こ、これって！？」

「そうさ、やっぱり解るかい？っま、あんたくらいになりゃ解るだろう。お茶代だ。受け取ってくれ。」
「ほんっとに頂いて良いんですか？」
「あぁ、あんたならかまわねぇ。どっかに高値で売り飛ばすつもりだったがな。」
「あ、ありがとうございますっ！」
「セフィ、それは何だい？」
「これはね、えっと・・・。」
「ティシア山の山頂にしかない”幻の水岩”っていわれてる物。ホントは”エメラルド・カウス・ストーン”って言うんだけどね。」
シフォンが偉そうな顔で横から出てくる。
「今言おうとしたのに～。」
「おっ！こいつファントマ付けてるよ。いやぁ、大したモン持ってるな。」
あわてて後ろに下がるシフォン。ファントマ取られると思ったのかな？
「だろう？俺もこいつが喋ったときはびっくりしたさ。」
ジャニスがシフォンを捕まえてくる。
「おぅ、このファントマってのはよ、作れるのは一握りの精錬術師だけだ。この辺りじゃナステリアのゼニスのトコだけか？」
「あ、それ、私のお母さん、です。」
「くくくっ、ゼニスの娘さんかぁ。そりゃすげぇや。」
「あぁ、あの人の娘なら間違いねぇや。シェーン、大したお方と組んだな。」

「そうよ。私が組んだパーティーよ。」
「ちげぇねぇ。さて、そろそろ行くとするか。悪いね。しっかりご馳走になっちまった。」
「さ、私たちも出発しましょ。」

みんなで片づけて。
出発！

第11話：でたっ！？

エドさん達と反対方向に分かれて、コムワードの森に向かって歩き始める。

「ね、シェーンさん。あの人達、お知り合い？」
「そうね。冒険者仲間、というか、同業者って感じかしら？」
「何かすごくいい人達ね。最初はチョット怖かったけど。」
「あまり安心しない方が良いわよ。冒険家なんてみんなそうだけど、いざとなったら仲間も売るわ。」
「そ、そうですか？そうは思わないけど…」
「あなたはまだ人生の経験が浅いから解らないのよ。」
「セフィ。そんなに悩むことではないよ。」
「そうですか？レオンさんはどう思います？」
「確かにシェーンの言う事も一理あるとは思うがね。まぁ、自分の感性を信じてみるのが一番じゃないかな。」
「自分の感性かぁ。」
「そうね、あなたが大丈夫と思ったのなら良いんじゃない？それで失敗しても諦め付くでしょう？」
「むぅ～。」
「セフィの場合は自分が信用ならないからね。」
「うるさいなぁ、シフォンだっていい人達だと思うでしょ？」
「物を貰ったからっていい人とは違うと思うよ。」
「ふふふっ、あなたが一番解ってるみたいね。」
「こいつ、たまに人間より人間のこと解ってるような事言うよな。」
「ねぇジャニス、あなたいつの間にかシフォンの味方だよね。」
「そんなことねぇよ。正しい方について行ってるだけさ。」
「この、裏切りものっ！」
「おいおい、今から仲間割れはやめてくれよ。」

「そうね、さぁ、少し急ぎましょう。予定よりチョットだけ遅れているわ。」

それからしばらくはみんな無口。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『コムワードの森　北入り口』

「さ、いよいよだ。」
「まぁ、何もないと思うけど一応気を付けて。」
「ね、ね、シェーンさん。ここからどのくらい歩きます？」
「そうね、大体2時間で妖精岩に着くと思うわ。そこでお昼にしましょう。」
「ジャニス、一応隊形は崩さないようにしよう。」
「了解っ！」
「それじゃ、行きましょ。」

森の中って思ったよりも明るいんだね。
ランプ点けなきゃ歩けないかと思った。
でも、あそこの木陰とか、こっちの木の虚とかから何か出てきそうだし、どこか遠くからは何かの声が聞こえるし、こっちの草むらはガサガサ言ってるし…。

「ね、ね、シフォン。」
「なに。」
「あんた、怖くないの？」
「別に。涼しくって気持ちイイよ。」
「もぅ、居眠りしてて落ちても知らないよ。」
「大丈夫。セフィほど寝相悪くないモン。」

「もぉ。」

その時、先頭を歩くシェーンさんが立ち止まった。

「ちょっと待って。」

頭を低くして口に手を当てる。
みんなにそうしろって手で言ってる。
あわてて物陰に隠れるみんな。

「ね、ね、何か出た!?」
「静かにしろよ、セフィ。まだ何も解らねぇ。」

後ろや横を盛んに気にしてるレオンさんと聞き耳を立てているジャニス。
シェーンさんも戻ってきて一緒に隠れる。

「シェーン、２０歩先、こっちの方だ。２っつ。何か動いてる。」

ジャニスがシェーンさんに報告する。
すごい！音だけで解っちゃうんだ。

「えぇ、確かにあっちから何か気配がしたわ。」
「敵か？」
「解らないわ。」
「よし、みんなは待っててくれ。私が見てくる。」
「頼むわ。」

レオンさん、だいじょうぶかな？

レオンさんが偵察に行ってからしばらく経った。
こういう時って時間が経つのが遅いんだよね。
もう1時間も待ってる気がしてる。
周りで物音がするたびにビクビクしちゃう。

「セフィ、大丈夫か？」
「う、うん、だいじょぶ、うん。」

そうは言ってみたものの、なんだか息苦しい。

「っ！何か来た。」
「あ、あ、あ。」
「シッ、静かにっ。」

ドックン、ドックン、ドックン、ドックン・・・・・

自分の心臓の音しか聞こえない。

「お待たせ。」

レオンさんだ！
もぅ！びっくりしたよぉ～
もうここから動けないよ。

「どうだった。」
「いや、何も居なかった。ただ…」

レオンさんが手の中の物をシェーンさんに見せる。

「こんな物が落ちてた。」
「へぇ。」
「なんだい、これは？」
「なんかの毛だな。」
「ふふふっ、なんだと思う？」
「解らないよ。ね、怖い物？大きいの？まだ居る？」
「これはね、野ウサギの毛よ。」

もぉ、いきなり目眩がしてその場に座り込んじゃった。
やっぱり冒険て疲れるよ。

「さ、気を取り直して出発よ。」
「ふぇ～」
「セフィ、行くぞ。」
「どうだった？少しはスリルを感じたかしら？」
「えぇ、もぉ、イヤって言うほど。」
「あははは、大丈夫だよ。そのウチ慣れるさ。」

こんなのに、慣れれるのかな？

何かさっきのバタバタで妙に度胸が着いちゃった。
うん、大丈夫。
みんな一緒じゃない。

「シェーンさん、もう半分くらいかな？」
「そうね、ただ、この辺りからだんだん森が深くなるわ。」
「は～い。」
「さっきまでとはだいぶ顔色が違うね。」

レオンさんが振り向きながら話しかけてくる。
「そうですか？」
「セフィはいろんな事が顔に出やすいからな。」
「解りやすくってイイでしょ？」
「そうだね。」
？？イイのかな？？

それからは話しもしないでとにかくシェーンさんの後を着いてみんなで歩く。
どの辺りまで来たかも解らなくなってきちゃった。
かなり深いところまで入ってきたのは確かよね。
日差しはほとんど届かないし、足下の土はかなり湿っぽい。
時々寄生を上げながら見たことのない鳥が飛んでいく。

「ストップ！」

片手を上げて小さく、そして、はっきりとジャニスが言った。
周りの音を一生懸命聞いている顔。
シェーンさんやレオンさんも周りを警戒している。
何だろう？またウサギかな？
私も周りを何となく見渡す。

ボテッ！

すぐ後ろで音がした。

「後ろだっ！」

レオンさんが剣を抜いてこっちに向かってくる！え？なに！
ゆっくり振り返ると…

「ぎゃぁぁぁぁぁ～」

何か居るよ何か居るよ何か居るよ～

とにかく必死でシェーンさんの後ろまで逃げてから振り返る。
レオンさんとジャニスが戦闘態勢に入っている。
その向こうに何か居た。
半透明のブニュブニュが２つ。

「ね、ね、シェーンさん。あれなに？」
「ご覧の通りスライムよ。全く、エドのヤツ。何処を見てたのかしら？」

あれがスライムか。もっと丸くってプルルンッ、って感じかと思ってたけど。
あのスライムはブニュブニュしててほとんど平ら。時々端っこが持ち上がっては体の一部を延ばそうとしてる。

「シェーン！どうすればいい？！」
「力づくで良いわよ！遠慮なくどうぞ！」
「じゃ、遠慮なく行かせて貰うぜ！」

ジャニスが腰から短剣を抜いてスライムその１の上に突き刺す。
その瞬間、スライムその１の端が持ち上がり、ジャニスの腹部にめ

がけて延びてきた。

グシャ！
ドゥフッ！

２つの音が同時に聞こえた。

あわてて飛び退くジャニス。
苦しそうにお腹を押さえている。

「ジャニス！大丈夫？」
「あぁ、油断してたな。このくらいなら平気さ。」

ジャニスが体制を整えるまもなく、レオンさんが剣を振りかざす。

ジャキーンッ！

思いっきりたたきつけられた剣先と地面の間でもがくスライムその1。
ピクピクしてたかと思ったら、青い煙が出てきて水みたいになって消えちゃった。

「っしゃぁ！」
「やったっ！」

レオンさんが1匹倒したっ！
その間にシェーンさんがスライムその2に攻撃！
腰から剣を抜きざまにスライムその2を剣の先で空中にすくい上げる。

「ふっ！」

そのまま為すすべもなくシェーンさんの目の前へと落ちていくスライム。

シェーンさんの胸の高さまで来た瞬間。

シュバッ！

シェーンさんが片手で剣を横に払うと、スライムは煙となって消えていった。

す、すご・・・。

第１２話：真実

戦いの終わった後、レオンさんがスライムのいた場所から何か拾い上げる。

「スライムの忘れ物だ。」

シェーンさんも自分の倒したスライムの落ちるであろう場所から何か拾い上げる。

「そこそこ良いサイズね。」

「ね、それなに？」

シェーンさんの手の中をのぞく。
水色の透き通った固まり。
クルミの実よりちょっと小さいくらい。
光が当たったところが緑色に見える。

「あ、フェアリーストーンだ。」

「そうね。」

「こっちもそうかな？」

レオンさんが指でつまんでみせる。
レオンさんの方に行ってみる。
さっきと同じ。
水色の固まりがレオンさんの指の間で緑に光る。
こっちはちょっと小さめ。

「ウン、同じ。」

「なぁ、何でスライムからフェアリーストーンが出てくるんだ？」
「私も詳しくは知らないが、以前士官学校で教わったときは、そのモンスターが好んで食べているものが出てくるとか？」
「そうね、あながち間違いではないわ。」
「さすがに私も詳しくは知らない。シェーンの方が詳しそうだな。」
みんなの視線を集めてシェーンさんが話し始める
「元々モンスターはこの世に存在し得ない生物だって知ってる？」
「え、そうなのか？」
「いやぁ、しらねぇなぁ。」
「私も何時の頃からモンスターが現れたかは知らないわ。ただ…」
そこでいったん言葉を切ってシェーンさんがこっちを見る。
私も知っている話。あまり話して欲しくないことだけど、みんなには知っていてもらった方が良いのかも知れない。
私はシェーンさんの目を見てうなずく。
「ただ、モンスターはその昔、精錬術師によって作り出された、と言われているの。」
風の音も聞こえないような沈黙。
「私も色々調べてみたんだけど、残念ながら事実みたい。セフィ、あなたから説明してもらった方が良さそうね。」
私はうなずいてみんなの前に出た。
シフォンが心配そうに足下にいる。
「シェーンさんが言ったようにモンスターを作ったのは私たち精錬

術師よ。」

しょうがない。いずれは言わなければならない真実。
シェーンさんのように調べる気になれば解る真実。
逆に、レオンさんのように知りたくても知らされない、いや、隠されてしまうであろう真実。

「あ、でも安心して。今はモンスターの精錬は禁止されてるの。」

それは事実である。
治癒用途等の一部の決められた精錬を除いて植物以外の生き物への精錬は禁止はされている。

「それで、どうやってモンスターを作るんだい？」
「さすがに私もあまり詳しくは知らないの。ただ、ベースとなる生物に何かしらのエレメントを精錬させると出来るらしいの。」
「なぁ、セフィ。生物に精錬なんて出来るのか？」

ジャニスが不思議そうな顔で聞いてくる。

「うん、出来るみたい。やったこと無いから解らないけどね。」
「つまり、生きてる物にもエレメントは存在する、と。」

さっきから難しそうな顔をして腕を組んでいたレオンさんが口を開いた。

「そう、生物にもエレメントは存在するわ。エレメントがあるってコトは精錬できるってコト。」

シェーンさんも一緒に説明してくれる。

「たぶん、昔は何と何で何が出来るか、なんてまだ解らなかったんだと思う。だから、色々なことが試されたんだと思う。」
みんなに解りやすいように。そして、誤解を招かないように言葉を選んで。
「だから、いろんな物からエレメントを取り出して、いろんな物と精錬していって、どんな物が出来るかを探っていったんじゃないかな。
そんな内に生物への精錬も試されたんだと思う。決してモンスターを作ろうとしてじゃなくて、実験として、ね。」
「その時生まれたモンスターが未だにはびこってるって事か？」
「うんん、それだけじゃないよ。その頃は役に立つ道具として使うために色々なのが作られたの。
例えばジャニスの実家で牛乳を搾ってる牛もそう。おいしい牛乳をたくさん出して、攻撃性が無くって、寿命の長い牛が出来たわ。」
「そう言うことか、なるほど。野生の牛じゃあんなに大人しくないしな。」
「牛だけじゃなくって、馬も、羊も、犬も。みんなそうやって役に立つように精錬されてきた物だから。」
「なるほど。我々に役に立つように、か。」
「そう、そして、そういう物を試行錯誤で作っていく途中の副産物がモンスターって訳、だと思う。」
「なるほど。つまり、さっきのあいつは何かしらの生物にフェアリーストーンのエレメントを精錬させた物って事だ。」
「そう言うことになるわね。」
「そうやって出来てしまったモンスターのほとんどは精錬術師の手によって抹殺されていったの。
ただ、中には脱走した物や、精錬術師の手に負えず、逆に反撃にあ

ってしまう事もあったって話。」
「ひでぇ話だ。役に立つモン作ろうとして出来てきたモンにやられちまうとはな。」
「そうね。そしてそうやって出てきたモンスターの内ほんのごく少数が環境に順応しながら子孫を増やして生き延びてきたみたい。」
「でもよ、それにしちゃ今居るモンスターの種類は多くねぇか？俺が知ってるだけでも結構居るぜ。」
「そうね、たぶん生きていく内に進化したり、種類の違うもの同士の交配なんかで種類が増えたんだと思う。」
「結構ややこしいんだな。」

第13話：到着と発見と予感と

「さ、そろそろ行きましょう。思ったより時間がかかってしまったわ。」

シェーンさんの一言でみんな一斉に準備を始める。
なんか、すっきりしたような、余計に重荷がかかったような、複雑な気分。

それからはさしたる問題もなく進んでいく。

相変わらず足元はぐちゃぐちゃで日差しもほとんどない。
ただ、だんだん慣れてきたせいか、進む速度も上がってきた。

「フンッ、フーン、フフフフ～ン、フッフフ～ン、フフフフフフ～ン、っと！」

さっきからジャニスが変な歌を口ずさんでいる。
ジャニスもだんだん慣れてきて余裕が出てきたのかな？

「フ～ン、フッフフ～ン、フフフフ～ン、フッフフ～ン、っとな！」

自分で変な合いの手を入れながら。

「ジャニス、もっとまともな歌歌えないの？」
「あ？ダメか？」
「決して上手いとは言えないわね。」
「牛守の歌ってしらねぇか？しらねぇよな。」
「どうせ聞かせてくれるなら、上手い方が良いな。」

「レオンまでそう言う事言うのかよ。」
「気分がいいなら良いんじゃないか。」
「あぁ、やっと冒険らしくなってきたからな。」

しばらく歩いていくと、いきなり開けた場所に出た。
周りを木に囲まれてて、低い草に覆われている。
まるで誰かが手入れをしている庭みたい。
さらさらと風が流れて小さな花が揺れている。

「う～ん、気持ちイイ所だね！」
「すごいな。こんな所にこんな場所があるんだ。」
「チョット休憩しようぜ。さすがにハラ減ったぜ。」
「そうね。」
広場の真ん中まで来た。
ぐるっと見渡してみると全ての方向が森に覆われてる。
太陽の方向でどっちから来たか解るけど、それがなければ完全に方向が解らなくなってしまいそう。

しばらく進むと草の中に埋もれている石があった。
背丈の半分ほどの高さで、その半分は草に覆われている。

「お、良い石があるぜ。ここで休もう。」
「そうだね。」
「さぁ、着いたわ。」
「え・・・？」
「そうよ、目的地に到着。これが妖精岩よ。」
「これ？」
「何か、もっと、こう…」
「大きくってさ。」
「これぞっていう。」

何かチョット気が抜けちゃったって感じ。
みんなも同じ意見みたい。

「小さくって悪かったの！」

え？何か後ろから声がした？
振り向いたけど誰もいない。

「ね、今なんか聞こえた？」
「いや？でも、誰か喋ってたな？」

ジャニスにも聞こえたみたい。
やっぱり不思議そうな顔で周りを探してる。

「そっちじゃないわい。」

「ほぇ？うわぁ！」

チョット上の方から声が聞こえて目線を上げると、虫みたいのが飛んでた。
視点を合わせてよく見ると…

「あ、あ、あなたは…だれ？」
「誰とは失敬じゃな。」

よく見ると白いヒゲを蓄えて、黄色い帽子をかぶったおじいさん。
緑のズボンに赤いチョッキ。先のとがった靴に大きな鼻の頭にちょこんと載った丸い眼鏡。

「あぁ、あなたはドワーフ族の方ですか？」
「まぁ、そうじゃの。妖精、とも言うがの。」
「ちょ、ちょっとまって。妖精？」
「妖精ってなぁ、羽生えて飛んでるんだろ？」
「かわいい女の子で、フワフワっと。」
「でも、でも、ドワーフ？」
「んにゃ。」
「ま、ドワーフ、だわな。」
「やかましいのぉ。ドワーフが飛んだらイカンのか？」
「ドワーフは飛ばないけどヒゲ生やした小人さんで、妖精は羽生えて飛んでるけど女の子で。」
「あ、相の子？」
「あぁ、なるほど。」

私とジャニスとシェーンで妙に納得。

「違うわい！」
「え、違うんですか？」
「妖精が飛ぶのはな・・・」

おじいさんがごそごそと腰の辺りから小さい袋を出してきた。
袋を開けると中からきらきら光る粉をすくってみせる。

「これのおかげじゃ。」
「それは何ですか？」
「見たことねぇな。」
「セフィ、あなたは解る？」
「え？えっと？」

近づいてみる。

金色と白と青。
いろんな色の粉が混ざってきらきらして綺麗。
何だろう？
おじいさんは持っていた粉を体の回りに振りまいた。

「あ、飛んだ・・・」

飛んでるときに、さっきの粉が背中の辺りでキラキラ舞ってる。
あぁ、これが羽に見えるんだね。

「これでこの粉の正体は分かったじゃろう？」
「フェエアリーパウダー。」

シフォンがぼそっと答えながら石の上にすとんっと降りた。

「ほぉ、ファントマを持ってる猫とな。」

おじいさんがまた石の上に降りてきた。

「えへへ、これ、私のお母さんが・・・」
「なんと！ということはゼニア殿の？」
「はい。娘のセフィアです。精錬術師をやってます。」
「そうじゃったか。これはこれは。ということは。いや、待てよ？」

おじいさん、何か考え中みたい。

「あ、あの、もしもし？」

おじいさんの目の前で手を振る。

「お、おぉ、すまん。そうか、そうじゃったか。ということはゼニア殿の一番弟子じゃな？」
「う～ん、たぶん、そうなると思う。」

おじいさん、私の曖昧な返事に頷いてるよ。

「そうかそうか、弟子を取らんゼニア殿の1番弟子か。それなら安心じゃ。セフィア殿、折り入ってお願いしたいことがあるんじゃが。」
「はい、なんでしょ？」

みんなも身を乗り出してくる。
新しい仕事と冒険の予感。

第１３話：到着と発見と予感と（後書き）

ここまで読んでいただいた方にまずは感謝。

まだまだセフィ達の冒険は続きますが、訳あってしばらくお休みさせていただきます。

本業の方が忙しくなってきたというのが理由です。

次話投稿予定は桜の咲く頃です。

では、またここでお会いしましょう！

花粉症と腰痛でぐだぐだな巌櫻

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4569d/

～セフィア～　バーンタウンの精錬工房

2010年10月28日03時14分発行